

第29期社会教育委員の会議

第3回定例会

議事録

令和3年2月26日

【1】開催日時

令和3年2月26日（金）18時00分～20時00分

【2】開催場所

リモート会議

【3】出席委員

坂倉委員（議長）、堀井委員（副議長）、小泉委員、奥平委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、新海委員

【4】出席職員

教育委員会事務局

林生涯学習・地域学校連携課長事務取扱、大井社会教育係長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【5】傍聴人

無し

【6】次第

1 意見交換

- （1）「おやまちプロジェクト」現地視察の振り返り
- （2）「協力・連携・協働の活動シート」から関係性のしくみの検証
- （3）活動スケジュール（案）について
- （4）その他

2 その他

○議長 皆さん、こんばんは。時間になりましたので、第29期、3回目の定例会を始めたいと思います。

緊急事態宣言下で、対面で集まるのがなかなか難しい状況ですので、今回は社会教育委員初のオンライン開催ということになりました。皆さん、お手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

20時以降は出歩かないようにということでもありますので、今日は30分ほど早めに始めて、できるだけ早めに終われるように進行していきたいと思います。

○議長 今日の議事を始めようと思うのですが、初めてオンラインなので、いつも使っている方もいれば、たまにしかという方もいらっしゃると思いますので、まず、速記の方が会議室と違って、今誰が話しているか分かりにくいようなので、発言の冒頭にお名前をいただければというのと、できれば表示はお名前に変えていただけると、意見交換などもしやすいと思います。

それから、チャットとか、こういう情報があるよみたいなこととか、ホームページ、URLとかを共有したりとかができると思いますし、関連する話題をメモ代わりに使ったりもできますので、必要に応じて使っていけるとスムーズだと思います。誰も発言しないと、しいんとしたままずっと時間がたつので、いつもよりも積極的に発言していただけると活性化すると思います。初めてのことで、どうなるか分かりませんが、試し試しやっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

今日は、まず大きく3つ、前回、11月に「おやまちプロジェクト」を訪問して意見交換しましたので、軽くその印象、振り返りをして、それから宿題が出ていました。協力、連携、活動シート、「おやまちプロジェクト」だけではなくて、区内いろいろな取組があるので、それぞれこんな活動がありますよというのを報告してみましよう。その中から、どういうふうにすると、いわゆる連携、協働が生まれていくのかみたいな、その秘訣を探っていくということ、そこが本日のメインになるかと思います。

今日が今年度最後ということになりますか。

○事務局 一応その予定で考えております。

○議長 29期、今年はこの状態でなかなか集まれなくて、3回しかないですけども、期自体は来年度いっぱいありますので、今日最後に、来年度どういうふうに進めていこうかというすごく大きなイメージの共有ができるといいかなと思っています。

まず、1つ目ですけども、「おやまちプロジェクト」現地視察の振り返りということで、

その前に、今日の議事録の署名については、2名の委員にお願いできればと思います。よろしいでしょうか。ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

それから、前回の、第1回、第2回の議事録の承認ですけれども、ちょっと順番が入れ替わってしまいましたが、本日の会議の日程がなかなか決まらなかったのと、皆さんから修正が特になかったということもあるので、2名の委員に署名をいただいたということです。皆さん、御了承いただければと思います。

ここまでのところ、よろしいでしょうか。進め方とかが大丈夫であれば、議論に入っていきたいと思います。

「おやまちプロジェクト」の現地視察です。委員は、授業で残念ながらお越しいただけなかったですけれども、参加された方、ちょっと振り返りつつ、思い出しながら、今日の議論につなげていきたいと思っています。

とはいえ、覚えていないよという方もいるかもしれない。どんなことをしたかというのと、夕方、尾山台の商店街で歩行者天国の時間帯に、大学生がちょっと芝生を敷いたりとか、椅子、テーブルを出したりして、子どもだけじゃなく、大人も商店街オープンスペースに自由に立ち寄れて、おしゃべりしたり、遊んだりできる、そういう活動をしている。その時間帯、4時から6時ですけれども、皆さん、早く集合できる方は、ちょっとその活動の様子をのぞいていた後に、地区会館の会議室で「おやまちプロジェクト」代表理事の高野雄太さんにお話をいただいて、その後、意見交換をしたというのが前回です。

今日は、そのほかの事例も踏まえて、協働がうまくいくのはどういう要素が必要なのかということ、ある程度自由にいろんな意見を出していきたいと思いますが、振り返ってみて、どんな印象があったか、こういうところがポイントなんじゃないかというのを少しシェアいただければと思います。大事だなと思ったこと、ポイントがあるようでしたら、ぜひ共有していただければと思います。

私のメモで、皆さんのファーストインプレッションで、お互い大人が子どものためにやるみたいな感じではなく、大学生も楽しんでいるし、それぞれの立場で楽しんでいる雰囲気がとてもいいねみたいな、そういう印象をうかがったりとか、あるいはあまりにも子どもが多くて、道路で走り回っている、これはさすがに危ないのではないかというような意見もありました。確かに大学生が全てを見ているわけでもないのに、そういう危険性、ぶつかったりとかというものもあるかもしれません。

ちなみに「おやまちプロジェクト」は、あその後、子どもがいっぱい集まり過ぎるために、

一遍活動を中止するということになりました。2つの要因があって、皆さんが御覧いただいたように、車にぶつかるということはないんですけれども、危ないねみたいなことがあったのと、緊急事態宣言とかが出て、オープンスペースとはいえ、人がたくさん集まっているということ自体が、商店街としてもちょっと今は控えたほうがいいかなみたいな、2つの要因で、子どもは5人とか10人とかだったら続けられたのかもしれませんが、20人とか来ると、ちょっと同じやり方では続けられないということで、1回中止という形になったんです。ここ何週間かは、ちょっと試し試し、少しまた再開をしているところではあるんですけれども、静かに数人が、顔見知りの5人ぐらいとか、10人ぐらいが立ち寄っての規模で再開している。ちょっとした後日談なんですけれども。

あとは、大学があるということはまちにとってすごくメリットになるねといったようなこととか、いろいろありました。とはいえ、尾山台のような、大学、小学校があつてということがあるからできるというよりも、そのまちそれぞれの資源を使ってやっていくということが大事なんじゃないか、そんなような意見もありました。

ほかの委員の方で、ここは大事だったんじゃないかということがあれば、ぜひともシェアいただければと思います。

○委員 参加してみて、高野さんが目指しているところは、尾山台の暮らしをもっと豊かにしていく。それで課題解決ではないアプローチ、楽しんでいくということをお話されていて、その活動をしていく中で、偶然の出会いや偶然にあったことを見逃さない、そこが大事ですよと言っていた、そこがヒントだなと思いました。現場で気づいたことを基に人と人がつながって、行動して行って、また気づいてと、そのサイクルの中で、必要なことがあれば人に訪ねていったり、それが先生や、まちの人とどんどんどんどん展開して行って、うまくいかないこともありながら、継続、いろんな形でつながっているというのがとても印象的でした。

○議長 ありがとうございます。すごい重要なポイントですよ。どうしても困っている人を助けるとか、課題を解決するために、目標、目的を決めてやろうというのが一般的なこれまでの市民活動、地域活動だったと思いますけれども、おやまちの場合は、むしろ何かやってみて、起こることをちゃんと振り返って、次につなげていくというような進め方がいいのではないかとというようなことをおっしゃっていましたね。

○委員 子どもたちが誰かと約束をしなくても、そこに行くとなんかいて、自由に遊べる空間があるというのは、ここ近年ではないことで、とてもいいなと思いました。また、異

学年交流もそこでは行われているようでしたし、また大学生のお兄さんやお姉さんとの交流もあったり、自分の住むまちでそのような自由な空間があるというのは、先ほどやっぱりちょっと危険もあってということで、そこは懸念される場所ではありましたが、最近ではなかなかできにくいようなことだなと思って、とてもいい取り組みだなと感じています。

○議長 ありがとうございます。付け加えて、うちのゼミの学生でこの間卒論を書いた学生が、子どもの放課後の居場所をテーマにして、尾山台小に協力していただいてアンケート調査をして、子どもが自発的に遊びに行ける地域の場所というものはどういうところにあるんだろうみたいな。子どもは行きたいと思ったとしても、勝手に行くわけにいかないので、親の理解が要る。親が行ってもいいよという判断をするのはどういうポイントがあるんだろうみたいなことを聞いた。すごくおもしろかったのは、重要なのは親と子どもの信頼関係、地域の問題じゃなくて、ちゃんと子どもが言うことを聞くとか、子どものことを親が信頼しているとか、判断力を認めている、そういうことだったんですけれども、商店街って顔が見え、誰がやっているかというのは明らかだし、そういうところが、親が自然に子どもが1人で行っても大丈夫だと思えるポイントだということが分かりました。

あと、漠然と地域の人というよりも、都市大の学生、顔の見える学生がいるということが結構安心感とつながっていることが聞けました。商店街みたいなまちの構造というのは、実は親にとっても、少し何かが変わればすごく安心感の持てる場所になっていくんじゃないかなという印象がありました。

○委員 この間遊んでいるお子さんに聞いたところ、児童館は少し離れた場所にあるので、あまり利用していないというお話がありましたので、やはり尾山台の地域では、最寄りの児童館などがいないことから、その場所に適した状態で、「おやまちプロジェクト」の中で、お子さんが安心して遊べる場所をつくっている感じがしました。

また、うちの地域では児童館が最寄りでありますので、今、議長がおっしゃった状態のような形というのは、その児童館に行けば誰かがいる、それから、児童館の前にちょっとした広場があるんですが、そこへ行けば誰かが遊んでいる、そういう場所があるんですね。そういうところへ行けば、親も安心して出せるという状況はあります。ですので、地域によって、子どもたちが集える場所が遠いところと最寄りにあるところで、少し状況がまた違うんじゃないかなと感じました。

この前の「おやまち」の見学をさせていただいた後に、お話を伺って、動画を見せてい

ただ、危険なことに対しての保険を考えてしまうと、逆におもしろくない部分もあるんですけども、何か破損をしてしまうような場合の賠償みたいなものもやはり考えておくというのは必要になってくる部分もあって、ただ、あまりそういうことだけに縛られてしまうと、やっぱり活動が制約されてしまうと思いますので、できる範囲で地域によってやっていくという必要があるのかなと思います。適宜、保険などの安全面も考える必要があるかなと思いました。

○議長 子どもの居場所づくりそのものもすごく大事ですし、学校やその地域、住民の方や商店街の方、地域にはいろんな立場の方とか、いろんな組織、施設があるわけですけども、どういうふうに連携していくと子どもたちにより安心な状況が生み出されるかというところもポイントかなというふうに思います。いろんな資源があったとしても、熱意がある人がいないとなかなか動かないんじゃないかみたいなお話もあったんじゃないかなというふうにも思います。

○委員 そしがや夏まつりというのを活動シートの中で書きましたが、キーパーソンなんですけれども、青少年委員の現役さん、それからOB、PTAの元役員だった人、それから町会長さん、元学校で副校長先生をしていらした方が異動された後も関わってくださってとか、そういう個々の活動をしているときにいろいろ接点があった方々で、同じ気持ちでやろうというのがあると、やっぱりそこに何か生まれるということがあるので、その交流のときがチャンスだと思うんです。ですから、そういうときにそういう方と何ができるかということ、また何か雑談している中でも、何かアイデアが出てくるとと思いますので、やっぱり人だと思います。

○議長 なるほど。非常に重要なポイントをありがとうございます。立場が違って、思いが共有できて、何か一緒にやろうみたいな、そういう関係性ができれば、立場、組織、領域を横断していろんなことが動かしていけると思います。それが起きにくいのは、やっぱり立場が違う人とあまり会う機会がないとか、あったとしても思いは聞けないですね。この委員会でも、多分皆さんそれぞれすごい熱い思いがあるんだと思うんですけども、そういう部分はあまり聞かれないわけですね。意見はどうですかみたいな話とか、何か参考になる事例は知っていますかみたいなことで、皆さんがどんな思いでこういう活動をされているのかみたいなのは、意外と語り合う場所がなくて、多分「おやまちプロジェクト」は違う立場の人が割と思いをすぐ語るみたいなところもあって、逆にそういう仕組みが生まれてくると、さらに加速されるということもあるのかなみたいなことを思いながら伺っ

ていました。ありがとうございます。

時間の問題もあって、宿題というか、活動シートを書いてきてくださった方がいらっしゃいますので、そちらのお話を伺っていいかなと思います。

ちょっとだけおさらいなんですけれども、地域と学校の協力、連携、つながりといってもいろんな水準があるよねみたいな話が出て、つながっていたとしても、協力というのは実はそこかしこで何らか協力し合っているということは起こっている。それが何か一緒に連携してやっていくという段階、さらに、2つの地域と学校が一緒になって一步踏み出さない限りは起こらないようなことで、その関わりの深度って実はいろいろあるんじゃないかというようなことを話しました。それが協力とか、連携とか、協働ということでした。

それから、この後活動シートを見ながら、それぞれこんな活動がありますというのを伺えればと思うんですけれども、委員には幾つか事例をまとめていただきましてありがとうございます。今言っていたのは、協力なのか、連携なのかということと、それから関係性の度合いのところは、度合いというか、その方向性というか、地域のほうが一方的に学校に協力していますよというものから、一方、学校が地域に対して協力していますよという、その両極があって、そのちょうど真ん中に地域と学校がお互いにベネフィットというか、メリットを享受しているという状態があるということです。

事務局から何か補足がありますか。

○事務局 特にはないんですが、事例がちょっと分かりにくく、多分委員の皆様も書きにくかったんだろうなというのはありますので、事例によっては、協力とか連携、それから協働ということで、定義が定まっていないということも1つあるかと思っておりますので、資料2を参考につけてはいます。デジタル大辞泉では、「協力」とは、「連携」とは、「協働」とはと書かれているんですが、この会議ではどういうふうに位置づけていくのかということと、一方では、あまりこれに縛られてしまうと、なかなか進まないんじゃないかということもあつたりしますので、そういうところをこれからどうしたらいいのかということかなとは思いますが、とりあえずそれぞれの委員の皆様が書かれたことが、いいとか悪いとかというよりもこんなふう感じたということで進めていったらいいのかなと思っております。

○議長 ありがとうございます。これは連携なのかみたいなどころはそんなに深掘りせず、むしろどういう条件が整うと協働が生まれやすいのかを考えつつ、事例の共有をしていければと思います。

委員から簡単に事例を伺えますか。たくさんありがとうございます。

○委員 ①から⑥というふうにあるんですが、①から④、つまり学校運営委員会、学校協議会、学校関係者評価委員会、学校支援地域本部というのは、これは区内の小学校どこでもあります。ただ、お集まりの委員の皆様方は、学校関係者の方でない方がおられますので、何か御質問の点があれば、後ほどお答えしたいと思います。

⑤と⑥に書いてある内容ですが、これが以前から大体学校ってこういう形で地域の方に支援していただいていることが多いなというもので、例えば1年生の生活科で公園に出かけて秋見つけをするときに、ボランティアの方にお手伝いいただいて、1年生がなかなか知らない木とか花の名前とかを教えていただいたり、安全上の配慮をしていただいたりということをしたりとか、⑥については、「まちたんけん」で、地域にある様々な施設、あるいは商店、各企業などに協力していただいて、いろいろと教えていただくというようなものが、これはもう従来から学校はこういった形で御協力いただいていることが多いというものです。

やっぱり全体を通して思うこととしては、先ほどの関係性の度合いという点で、全部左側、つまり地域から何かをしていただくということがどうしても多くなって、学校が何か地域に貢献できているとか、そういったものは実感を得にくいものであるなというのを再確認したような次第です。

○議長 ⑤番、⑥番ですけれども、これは学校のほうから働きかけて、地域に協力をお願いしているというのが発端だったのでしょうか。

○委員 そうです。これは、本校に限らず、大体どこの学校も同じようなものがあると思います。世田谷区に限らずということです。

○議長 なるほど。1回はいいけれども、2回目、3回目、あるいは毎年毎年になると、なかなか持続させるのが難しいケースもあるのかなと思うんですけれども。

○委員 そこは僕も思うんですけれども、意外と⑥番の2年生の生活科の「まちたんけん」は、地域の方がすごく積極的に御協力いただけているところです。例えば会社などに訪問したときに、子どもたちの様子をその会社のホームページにアップしていいかということをお願いいただいたりとか、そういった意味では、企業側の広告活動に貢献している部分だなんて考えたりするところもあります。

○議長 なるほど、ありがとうございます。確かにここはまちセンとか、企業もあるんですね。

○委員 そうですね。ほか6社となっていますけれども。

○議長 逆に言うと、これは地域が学校に協力しているという形になっていますけれども、その地域の人もやりがいであったりとか、社会貢献の実績だったりということで、何か得るものはあるということなんですね。

これも多分うまくいっているところと、そうじゃないところはあると思いますけれども。

○委員 あると思います。あと、補足ですけれども、こういった活動をほかの学年とか、いろんなところで、学校ではよくゲストティーチャーという呼び方をするんですが、今年とはとにかくこのコロナの影響でできていないことが非常に多いです。従来どおりできていれば、ここに挙げられる事例はもっともっとたくさんあったかなと思っているところです。

○議長 なるほど、そういうことですね。ありがとうございます。

ほかの委員の方から質問とかありますか。ほかにも事例がありますので、皆さんの話を聞いてからでも結構です。

○委員 今、委員がおっしゃった「まちたんけん」などと似たもので、職場体験ですとか、中学校の生徒さんが地域に協力を仰ぐものもありますし、それから、夏休みに子どもたちにいろんな体験の場を提供する、そういうのも各学校でなさっていると思いますので、少しずつ地域によっては違うかもしれませんが、あるかと思いますね。

それから、高校もボランティア、奉仕活動という授業があるので、やはり地域に協力を仰ぐというようなことで、学校から要請があって、地域が協力をするという形の例は各地域でいろいろあると思います。

○議長 ありがとうございます。

では、続いて、委員の活動例を御紹介いただけますか。

○委員 今年、運動会を開催するに当たって、小学校の中に人があまりたくさん入るのは難しいということで、保護者の方はできるだけ来校せずに、自宅でオンライン配信でお子さんの応援をしてくださいということで、このようなことがありました。継続的な活動では今のところないんですけれども、1つの例として御紹介をさせていただきました。

○議長 ありがとうございます。何かがあったときに、おやじの会とかに関係している人が主体的に動いて、新しい対応策をつくっていくというのは、すごく大事ですし、多分日常的なつながりがないと、急にコロナになったからとか、あるいは地震が来たからとかいって、知らない人同士が協力し合うってなかなか難しいと思うんですけれども、多分これは日常的な関係があるからこそ、こういう状況で協力し合おうみたいなことが生まれたの

かなというふうに何となく想像しました。

○委員 特におやじの会って、いろんな会社とかに勤めていらっしゃって、いろんな技をお持ちのお父さんたちがたくさんいらっしゃるので、いろんなことのできる団体だと思います。

○議長 ありがとうございます。では、おやじの会の事例ということで。

続いて、委員の御紹介をお願いいたします。

○委員 私は2つ挙げさせていただいたんですが、1つは、前回少しお話ししたこともある下高井戸の駅の高架化に伴う事例を挙げていて、これは小学校を借りて、地域の商店街や電鉄会社、こういう連携先の人たちがそこでワークショップをしたり、話し合ったりして、活動しています。まだ継続してやっている活動ですが、キーパーソンがいるわけではなく、課題がメインになって、まちを盛り上げて使いやすくしていこうという目的はあるんですけども、誰かが盛り上がって楽しくわくわくやっているというよりは、そのわくわくとやらされているの間ぐらいな感じのする気がちょっとしています。なので、もっと住民が積極的にか、関わっている人たちがもっとわくわく感とかが盛り上がっていくのが課題かなと個人的には思っている活動です。

もう一つは、赤ちゃんを連れて学校へ行こうという活動で、これは世田谷区も関わってやっている活動ですが、私のやっているはぐくみプロジェクトでも、今年度、コロナがなかったら、これを中学校でやっていきたいなと思っていたんですけども、初めてやるには少しハードルが高いので、今回は見送って、また収まったらやっていこうと思っていますが、こうやって書いてあるとおりで、学校にとっても、子育てが今いっぱいいっぱいなお母さんたちにとっても、自分のやっていることが中学生の子たちの役に立つんだということで、結構モチベーションが上がる、そういった相乗効果もあると聞いている活動なので、場所は中学3年生を対象に、学校の家庭科の授業の中でやるということでは、地域と学校の協働かなというふうに思っています。

○議長 ありがとうございます。私、あまり詳しくない、キーパーソンの方が考えたというか……。

○委員 多分キーパーソンの方が仕掛けたんだと思います。もし深掘りということであれば、その方にも少し聞いて、具体例とか、実際の話とかはそうなんですけれども、こういう行政との連携の形にしていっていると。

○議長 中学校に行きたいよというお母さん、赤ちゃんというのは、どのように集めてい

るんですか。

○委員 世田谷区のサイトと、あとNPOのせたがや子育てネットのホームページで募集をかけたり、あとは、私たちのように、つなぎのところをやりますという手を挙げた団体も自分たちで募集をかけたりということで、結構意外と集まると言っていました。

○議長 そうなんですね。

○委員 子どもさんの年齢もある程度小さいお子さん、年齢が決まって、去年来た子はもう次の年は大きくなってしまいうんですけれども、意外と集まるんだよという話は聞いていますね。実際に自分でやっていないので、ちょっと聞きかじりな状況ですけれども、そんなことです。

○議長 ありがとうございます。続いて、委員に御紹介をお願いできますか。

○委員 これは結構歴史が古いんですよ。もう30年ぐらいになるんですが、中学校が一時荒れましたよね。そういうこともありまして、当時の校長先生とか、PTA会長さんの発案で、何とかしなきゃいけないんじゃないかということで、組織を立ち上げたんですよ。これは今、一例、ウオークラリーとなっていますけれども、フリーマーケットをやったり、いろんなことをやって、子どもたちを何とかしようということから始まったんです。当初は、学校の応援団、あるいは子どもたちの応援団という形だったんですが、結果的には、地域の人たちがいろんなことをやりながら、絆を深めている団体かなというふうに思います。いろんな意味で、もうこれだけ続いていますといろいろあるんですけれども、でも、等々力、それから東深沢地区の子どもたちのために何とかしようということから始まって、要は大人が結構楽しんでいるというようになってきているというのが、今の実情です。

先ほどからお話を聞いていると、やっぱり子どもたちのため、学校のためということで、学校がどうしても地域にお願いしますという形になりがちですよ。ウィン・ウインの関係になればいいんですが、どうしても一方通行になりがちですけれども、ただ、これは尾山台のプロジェクトもそうですけれども、結果的には子どもたちのため、学校のためにやるのが、地域の大人たちの学習といいますか、この前、高野さんが言っていた学びとつながりというんですか、そういうことが結果的には地域の人たちのメリットになってきているんじゃないかなというのが感想です。

○議長 ありがとうございます。30年近くも続いているというのはなかなか大変なことですね。最初のメンバーがずっとされているということなんですか。

○委員　そうですね。最初のメンバーがやっていますから、もう大分みんな高齢者なんです。若手がなかなか入ってこないというのが悩みだというふうに聞いています。やっぱりみんな、高野さんもこの前言われていましたけれども、やらなければいけないと思うと、全然長続きしないんです。結局はやりたい、楽しいというのが、続いている1つの秘訣かなというふうに感じています。

○議長　なるほど。ありがとうございます。では、委員お願いいたします。

○委員　これは、前々回会議のときにちょっとお話をいたしましたけれども、つながるといふコンセプトで始めまして、学校協議会での校長先生の一言から始まったんですが、実際にやっているのはその地域といいますか、ここのキーパーソンが、現役の青少年委員、それからOBの青少年委員も代々関わっていますし、青少年委員の活動で学校に行くときに、そのときにPTAの役員だった方々で熱意のある方、一緒にやりたいという方、それからそういうときに副校長先生でいらした方がほかの学校に転任をされリタイアされても関わってくださっているとか、あとは地域の町会長さんとか、商店会長さんとか、いろんな方々が、初めはそんなにたくさんではなかったんですけれども、この指とまれがだんだん広がりまして、輪が広がっていったという状況なんです。

これは始まって13年目ぐらいになるんですが、やっぱり継続をしていくと、どうしてもその中で、事務局側といいますか、いろいろなことをやる人たちの、人材とかを維持をしていかなきゃいけない。その維持とか、人材の確保がやっぱり一番今課題ではあります。そのこのところは、今課題というふうに思っているんですけれども、効果となっているところに、学校の校庭や体育館を使わせていただいているんですけれども、それでこのお祭りをやることによって、いろんな方とつながりができて、その地域が学校を使わせていただいているわけですが、その分、先生方もお店を出して下さったり、先生方との接点もあることで、逆に今度学校からもいろいろ、こういうことをしたいんだけどもというときに、関わりがしやすくなっている。それから、地域で行われる事業や活動にも、保護者の方や子どもたちも参加しやすくなっているという、その相互の協力、交流の連鎖が起きているというところがありまして、それは続けている効果かなと思っています。

お祭りをした後に、それで終わりではなくて、反省会ということで少し交流をするんです。そういう中で、今度こういうこともやってみようかというようなことがいろいろアイデアが出てきまして、その中で、行動力があって、やっぱり先ほど他の委員もおっしゃっていたように、おやじの会の方々が、それぞれ社会で働いていらっしゃる中で、いろいろ

ノウハウを持ってる。そういう方々が一緒になって、キャンドルナイトをやったりとか、そういうことにも発展をしている。思わぬことでつながりができて、いろんなことがやれたので、人材の確保、維持というのが一番大事かなというふうに思っています。

○議長 ありがとうございます。これも13年続いているということで、人手が課題という話ですけども、とはいえ、続いているからには続く要素があるんだろうと思うんです。

○委員 そう言いつつも、やっぱりできているというのは、それなりに人がつながっている、思いがやっぱり皆さん、共有できている部分があります。

○議長 これは学校側の相互の連鎖というふうにおっしゃっていました。学校側の変化というのはどういうことがあったんですか。

○委員 先生方も学校で子どもさんたちを教えていらっしゃるだけではなく、学校という敷地内ではありますけれども、学校で授業をしているときではない先生方が、お休みのときにお祭りに参加をしてお店を出してくださったんです。お店を出してくださることによって、例えばほっぺたにペインティングをすとか、そういうのをやってくさったりして、学校での生活以外のところで子どもたちと接点を持てるというところは、子どもたちのそういう側面もいろいろ見られる。それから、ほかの学校に転任をされた先生も、そのお祭りのときに遊びに来てくださったり、お店を手伝ってくださったり、そうすると、そこに在校生であったり、卒業生であったりも来ますので、久しぶりの再会でいろいろ話ができたり、交流ができたりと。学校の先生方も地域を知らないという部分もおありだと思いますので、その学校を使わせていただくことによってつながりができることで、いろいろ学校のほうから地域にお願いをするのがしやすくなる、やっぱり顔がつながるというメリットがあるのではないかなというふうに思っています。

○議長 ありがとうございます。

では、委員から、最後をお願いいたします。

○委員 前は、私は授業で欠席だったので、十分に意図を酌み取れているか分かりませんが、私が10年間ぐらい関わっていた烏山地域のお話をしますと、

1つ目は、私が関わってこれは六、七年なんですが、この地域のきずな実行委員会、今改めて見ると、みずとみどりの会とか、豊かな老後を築く会が主催をしております、そのほかの消防署、あと私の大学のゼミ生も連れて行って、この時期ですので、ひな祭りに合わせた行事をやっています。私たち大学生は、小学校低学年を対象に、9面体のさいころを使って、1年生は足し算の復習とか、2年生は掛け算のというような感じで、ちょっ

と遊びながらやって、ひな菓子をあげたりしながらとか、消防士の方は119番のかけ方とかを教えたり、あと地域の方は、古い80年前のひな飾りを持ってきて展示をして、ひな祭りってこういうものだよという行事を毎年やっております。それが明日ありまして、コロナなので、去年もそうだったんですけども、今年はちょっと形を変えてやりますが、そういう活動を行ったりしています。そういう意味では、地域と学校、あと子どもたちにとって、地域の人々や日本の伝統文化などを認知するための一助となっているといったところでは。

課題としては、他の委員の方もおっしゃっておられましたけれども、キーパーソンもそうですけども、やはり担い手がどうしても高齢化が進んでおります。そういう意味では、どう継続化していくかというのが大きな課題となっています。

そういう意味で、もう一つの活動を御覧いただくと、こちらのほうも同様なんです。実はこの「から北寺子屋」というのは、小学校の夏休み中の子どもたちの、ある意味居場所になるために学校を使わせていただいて、ここに書いてあるように、地域の方々がそれぞれの特技や趣味を生かした遊びや学びの機会を子どもたちへ提供する活動をやっています。これは私も今から十数年前にその小学校に加わってびっくりしたのは、夏休み中にそんなに子どもが来るのかといたら、毎日相当数の子どもの参加があるんですね。午前中プールが終わった後、1回お昼を食べて学校に戻ってきて、私はこれは驚きました。そういう意味では、地域の方がそれに協力して、学校を使いながら子どもたちの居場所、これは保護者にとってもかなり助かっていると思いますが、そういう意味では子どもたちの居場所の確保とか、学びの広がりにつながっているという点ではとても有意義であると思います。

課題としては、先ほどと同様です。地域人材の発掘、高齢化も進んでいます。そういう意味では、私が学校運営委員会の委員長をやっていたときは、それを心配して一応人材バンクをつくったんです。「から北ドリームバンク」というのをつくって、地域にどういう人がいるのかとか、そういうのをやっ払いこうと。あとPTAとか、こういう地域の活動に少しでも興味のある、40代、50代の人に徐々に、徐々に移行していこうというところからこれを始めたんですが、現在、少ないんですが、徐々に移行して、その人が中心になって、このから北寺子屋も進んでいるという感じです。

そういう意味では、まさにこういう活動って、人って非常に重要だと思うんですけども、あと場所も、あとはやっぱり時間なんですよ。人、物、金、時間なんですよ。そ

れをどうつくり出していくかというようなところが、今後課題かなと思うんです。いずれにしても、人材の発掘と確保というところは、活動にとって大きな課題かなというふうには考えております。

手短になりましたが、以上でございます。

○議長 ありがとうございます。「から北寺子屋」、すごいですね。放課後NPOアフタースクールというNPOがあって、その代表の方は、アフタースクールの事務所は新橋なんですけれども、実は等々力に住んでいらっしゃって、「おやまちプロジェクト」でも来てくださったりしていたんですけれども、本当に手づくりで地域の人材バンクをつくって、その人の特技や好きなことを子どもに遊びや学びとして提供するみたいな。市民先生ってアフタースクールでは言っていますけれども、そんなことをされてすごいなと思いました。なるほど、ありがとうございます。

結構今伺う中でも、活動自体は多様ですし、こういうふうに行くと、ただ単に協力をお願いしてやってもらって終わりではなく、それが長続きしたり、発展したりするというのが、例えば立場の違う人と思いでちゃんとつながるみたいなこと、あるいは一見やっただけでいる、多分市民先生というか、「から北バンク」の方、教える側の人も、自分の知っていることを、趣味のことを、得意なことを子どもたちに提供してあげているだけではなくて、その瞬間に得ているものもあるんじゃないかなと思うんですよね。だから、提供している中で得ている、それは形の非常に見えにくいものかもしれませんが、そういったものがあれば、また来年みたいになるのかなと。

あとすごくなるほど、世田谷らしいと言ったらちょっと違うのかもしれませんが、おやじの会は宝庫みたいな感じですけども、確かにいろんな特技を持っている方というのがおやじの会ですよ。おやじの方は、実はすごい多様でいろんなものを持っているんですけども、そういう専門性をその地域の中で父親として発揮する機会ができると、その人にとっても多分地域の中での活躍のきっかけにもなるし、学校から見たら、本当にいろんなものが宝の山みたいな、そういう感じになるんだろうなと。つながり方が変わると起こることも変わるんですかね。地域の中で自分の能力を発揮すると、役割がどんどん多面化して行って、しかも、祖師谷の事例のように、校庭でお祭りをすると、学校の先生が、先生以外の役割でその地域の中に入っていきっかけが生まれたり、関係性がどんどん実体化していくみたいなこととか、割と共通しているのは、やらされているから、やんなきゃいけないからというのが、楽しいからとか、好きだからみたいなことは、基本的なこと

なんだけれども、やっぱりどの事例でもそういう要素があるんだなということを再確認できたところがすごく大きかったなと思います。

またいろんな要素があると思うので、重なるところもあるかもしれませんが、協働が始まったり、続いたりというのはどういう要素があるといいんだろうみたいなことで、皆さんそれぞれ気づきがあったと思いますので、少しそんな議論をしていきたいと思います。

○委員 皆様の書いてきてくださったことから少し感じたのは、以前、「おやまちプロジェクト」の高野さんがおっしゃっていたのが、さっきも言いましたけれども、偶然を見逃さないということと、あと議長がさっき言っていた語る場、こういう活動に私もよく参加して、例えば子どもの一日料理の先生とかをやらせていただくことも夏休みとかに学校であるんです。そういったときに行って、作って、子どもたちと交流して、終わって、子どもたちのアンケートをもらったりするんですけども、一緒に先生をやっている人たちと交流したりとか、そういう場がないので、その場で終わって、私自身はそこで楽しかったり得るものがあるんですけども、もう一つ、もう一步、その運営の、一緒に違うことをやっている人とのつながりとか、そういう語る場、そこをつくっていただけると、またそこで広がりが出るし、意外ともう一声かけてくれるとやろうという人もいると思うので、運営されている方はそういうもう一步いけそうな人を見逃さないで、声をかけたり、語る場をちょっとつくったりとかするといいのかなと、人材ということで言えば、結構いると思うので、工夫次第かなとは思っています。

○議長 そうですね。確かに、委員とかで来る、あるいは講師として行くと、講師としての役割が終わると終わり。

○委員 あと、子どもについてくるお母さんたちも、意外と声をかけたらいいかなというお母さんがいなくもないので、スカウトマンじゃないですけども、そういう人材はいると思います。

○議長 なるほど、確かに。人材がないというのは、こういうことを手伝ってくれる人募集とか、この組織を担ってくれる人募集とかいうと、あまりいないですね。

○委員 いない。

○議長 ついてきたお母さんは、本当はどんなことをしたいんですかみたいなことを言って、思いとかを聞くと、もうできている団体の人も、団体の方の思いとか、個人的なこととかが語られると、そういう対応ができると、確かに何かそこから一緒にできることがないかなみたいな話になっていきそうですね。

○委員 あと意外とお母さんたちも悩みがあったりとか、お父さんもそうなんですけれども、そういうときに結構ぽろっと話すと、全く今ないような活動とか、発想が出てくることもあるので、何かわっと開ける 때가時々ある。ですから、偶然を見逃さないということ、語るというのはすごい大事だと思います。

○議長 本当に、かなり本質的なことかもしれません。なかなか自分のことを話していい場ってあるようでないですからね。

○委員 結構今、空き家ができたり、空き店舗ができていて、あと若い人たちも場づくりということで積極的になってきているんですけども、行かなきゃという、作り手が主体となっていて、本当に欲しい人が欲しいものをつくっているということが少ないかなと思って、そこをうまくつなげる。なので、そういうのを、さっきも言いました偶然がすごく意味があるかなと思うんです。

○議長 最近、教育というか、まちづくりとか、地域組織の脈で、創発的なコミュニティとか言ったりするんですが、要は組織というのはちゃんと役割が決まっていて、何をするかというのがあらかじめ決まっていて、ちゃんと動かせるというのが組織的な、だけれども、今、新しいことが起こるといのは、何をするか決まっていなだけで、一旦、堅い構造化された組織からちょっと離れたところにいろんな人が集まってきて、そこでは自分のことを自分の言葉で語っていいみたいな雰囲気があって、それを語っていることによって、いろんなことがつながり直したりして、そこからこういうことをやってみようとか、そこに来た人が本当の地域の課題、その方の語りの中から本当に地域の問題が特定されて、その人のことをどうしようかみたいなことが始まると、堅い町内会とかが、町の人のためにみたいにやっていることと全然違う質のことを自分たちでつくっていけるみたいな、それは絶えずいろんなことが起こるんですけども、何がいつ生まれるかよく分からない、そういう状態で、それがすごく実はイノベティブなんではないかみたいな議論があったりするんですけども、まさにそういう要素が、学校と地域の中にも生まれてくると、随分違うんじゃないかなと、今のお話から連想しました。

○委員 すばらしくまとめていただいてありがとうございました。

○委員 今、委員がおっしゃったように、ノミネーションとか、それから井戸端会議とか、ダベリングといいますか、そういう目的を持って会議をするとか、目的を持って集まって何をしようというふうに話し合うというよりも、そういうふうに目的を第1としない状況でも、普通の何かをやっているときでも、会議をしたときには余り成果が上がら

ないけれども、その後のダベリングでいいヒントが出てきたとか、そういうことってありますので、そういう自由に、フリーに話ができる、そういう場があるという、そこに誰が来てもいいというような、そこで今まで自分の世界にいなかった人と出会うこともあるかもしれませんし、そういう場があると、やはりそこから何か発生するというか、生まれるというのはあるのかなというふうに私も思います。

○議長 終わった後の反省会という名の交流の場が大事っておっしゃってましたものね。

○委員 そうです。そこから随分いろんなものが生まれましたから。でも、その反省会ということだけじゃなくて、何か話せる場所というのが大事かなというふうには思いますね。

○議長 逆に学校の方に伺いたい。例えばさっきの先生がお祭りに先生じゃない立場で参加するとか、その人の思いを語れることが大事みたいなことをつくっていくといいよという流れですけれども、それだけじゃなくて、いろいろ地域と協働するに当たって、例えば校長先生はどんな役割を担うべきなんでしょうかみたいなことってありますか。校長先生ってすごいいろんな人がいますよね。それで、意外と校長先生に左右されるという、今尾山台中の校長先生って、結構何でもいいよみたいな、どんどんやろうみたいな、教室を貸すからみたいな、部室として使ってみみたいな、結構そういう方なので、割と話が早いというか、地域からすると、そういう先生、要は地域との関係性を大事にして、比較的オープンにいろんなことを対応してくださる、あるいは本当にフランクに中学校のニーズをちゃんと伝えてくださって、何かできないかみたいなことも伝えてくださると、地域として非常に関わりやすいというか、でも、それって校長先生の人柄に左右されていてもいいのか、それとも地域と協働ということをやるとすれば、校長先生としてこういう役割を担うとうまくいくんじゃないかみたいな、そういう知見がもしあればすごく重要なのかなと思ったので。

○委員 今のお話とちょっとずれちゃうのかもしれないんですけども、やっぱりいろいろ難しいと思う部分は実際にあります。私が管理職になる前には、やっぱり地域の行事ですとか、そういったところに、先ほどのお話にもあったような、例えば土日のイベントとかというのはもうことごとく出ているタイプでした。そうすると、やっぱり地域の方々とつながることができて、逆に何かあったときにすぐに支えていただけるし、地域の方々とつながることによって、自分の知見も広がるしというところがあって、積極的にそちらに参加しているタイプだったんです。

ただ、今、校長という立場になったときに、個人としてはやっぱり同じような価値観でいますから、どんどんこういうことを続けていきたいと思っているところではあるんですが、例えば土日のイベントとかというときに、職員に対して、よし、みんな行くぞというのはなかなか今ちょっと言いにくい部分も正直なところあります。というのは、やっぱり今、私たちの現場でもすごく働き方改革とか、あるいはエネルギーはやっぱり子どもに直接影響するような教材研究とか、そちらのほうにかけたほうがいいのかという話がいろいろあるので、自分の思いとしてはそういうところに行って、いっぱい参加することによって得るものはすごくいっぱいあるんだぞということは伝えていきたいという思いはあるんですけども、オフィシャルにこの時間帯、ここに行ってくれというのはなかなか言いにくいなという部分も正直あります。なので、個々の個人の価値感とか、あるいはワークライフバランスとか、その人の時間の使い方、自己実現についての考え方とか、そういったところに委ねてしまっている部分があるのかな、これはどうしたらいいかなというのは、自分の中では大きな課題として捉えています。

○議長　こんなふうにやるといいよみたいなことってあるんですか。今の社会、行きなさいとは絶対言えませんよね。上から行けと言われてたら、あつという間にパワハラになるみたいなものがあるし、そもそも教員の在り方がそういうのが求められなくなっていくというのもありますし、なんだけれども、個人の価値観ってすごく大事だと思ったのは、という風潮であっても、やっぱり地域に出ていったほうが、ちゃんと子どものことに向き合うんだったら、そうしたいと思っていらっしゃる方も中にはいるはずで、それを一律禁止するのも、逆に違うんだらうなと思って、やりたい人はやったらいいし、そうじゃない人はそうじゃないやり方でパフォーマンスを発揮してくれればいいし、やっていないから、やっていないという後ろ指を指されないで、それぞれでいいんじゃないみたいになるといいなと思います。

○委員　本当におっしゃるとおりだと思っていて、例えば学校と地域という関係で、地域の方々がどんなことでもやってくれているかということ、地域の方々も別に自分のお仕事の時間の中で何かをやってくださっているわけではなくて、完全にボランティアでやってくださっているわけなので、そこに関して、学校の教職員のほうも、ある程度個人の判断に任せながら、ボランティアという形でやっていくというところで供する部分になっていくのかなというふうに思っています。

○議長　そうですね。役割だけの関係性になっていっちゃうと、うまく行っていたことも

だんだんうまくいかなくなるみたいなことが起こって、とはいえ、時間をかければいいわけでもないし、なかなか悩ましいところですよ。

○委員 やったら楽しかったというような雰囲気の中で、だったら、自分は来年もやるぞみたいな雰囲気にしていくことが重要なのかなというふうに思います。

○議長 ありがとうございます。〇〇せねばならないみたいな、何々したほうがより評価されるみたいな、そういう雰囲気をいかに出さないかみたいなのが本当に大事ですね。学校ってなかなか難しいですよ。

ほかにも別の切り口でも、今の話題でも結構ですが、皆さん、いかがでしょうか。まだまだたくさんありそうですし、人と人がつながるポイントみたいなのもあるし、片や学校の先生の立場ってやっぱり特殊だったりもするので、いかにその先生の力を発揮して、地域とうまく関わっていけるかというような、そういうところもポイントとしては大きいのではないかなというふうにも思ったりもしました。

議論は引き続き、来年度にも入っていくとは思いますが、もし、また後で戻ってきて構わないと思うんですが、来年度をどうしようかみたいなことを少し、こういった議論を深めていって、どういうふうに広げたり、より多くの人意見を取り入れたりして、最終的に提言をまとめる。最終的に成果物をまとめて、その成果物をつくったその先に、もうちょっと地域と大学のいい協働が世田谷区内に増えていくといいなみたいなところが、この委員会の大きなミッションなんだと思うんですが、それに向けて来年度、どんなふうに議論を進めたりするといいかって、ちょっと皆さん、今日はプレスト的にこんなことができたらいいなみたいなことを御意見いただければと思いますが、事務局では来年の下図というか、何回ぐらいお考えかみたいなことを少し事務局から前提を共有いただくことはできますか。

○事務局 はい、分かりました。例年はその年度に大体5回ぐらいやっていますけれども、コロナの影響によって、今年度に関しては3回と考えています。

来年度に関しては5月ぐらいから始めて、翌年の令和4年2月ぐらいにまとめることができるとは思っています。ただ、通常より2回少ないので、今回拙速にまとめるというよりは、皆さんの進み具合にもよってきますけれども、第30期も継続して検討していくという方法も1つあるかなと思っております。一応例年に沿って考えていくと、来期、来年度に関しては、4回目で新たな連携、協働の仕組みづくりということで、さらに今日の意見交換を深めていければいいなというふうに思っています。そして5回目に関しては、新

たな連携、協働の仕組みづくり 2 として、最終的にはどこの地域においても新たな連携、協働のモデル、そういう案が作成できるのかどうかということです。そういうことができると、6 回目に報告書の素案、7 回目に報告書案の検討、そして 8 回目に活動報告書のまとめという形ができるのかどうかということなんですけれども、僅か 2 時間足らずということなので、どこまで進めることができるかということで、とりあえず案の段階で考えてございます。

○議長 ありがとうございます。という状況ですので、今日は方針を決めなければいけないということでもないので、こんなことができたらいんじゃないかみたいなことを少し自由にお話しただいけると。この素案もこれじゃなきゃいけないというわけでもないと思うので、もっとたくさんやるべきだみたいな話もあるかもしれないですし、これで十分ですということもあるかもしれませんし、前回、前々回は割とワークショップ、シンポジウムのことをやって、そこで意見を集めてというようなことをやったりということもありました。公開ワークショップといったようなこともやりましたが、今期に関してはまだ始まったばかりで、最初の 1 年が終わってしまったということもあって、すぐ次回にワークショップというところまではなかなかいけないとは思いますが、ワークショップをやるというのは、来年度、やっぱりやったほうがいいんじゃないかということや、今の御提案だと、その次の期でやってみるというのもありなのかもしれませんし、いつ何をやるかというよりも、どういうことをこの後ゴールとしてというか、どういう取組をやるとさらにこの議論というのが深まったり、広がったりするのかみたいなことで、少し御意見をいただけるといいかなと思います。いかがですか。

前回のシンポジウムのようなものもいいというふうに思っているわけではないんですけれども、前回参加されていた委員、委員、委員、委員もそうですけれども、今期はどういうふうに進めていくと楽しくできそうですかね。

○委員 明らかに回数が少ないので、どういうふうにしていったらというのはあるんですけれども、コロナ禍のこういう状況の中で、ワークショップ的なことというのは、もうちょっと話合いで詰めないといけないと思いますけれども、可能なんでしょうか。こういう Zoom で皆さんに参加していただくというような形で、広くいろいろ拾うということも可能ならば、それも 1 つのまとめるヒントになるかもしれないですけれどもね。

○議長 そうですね。確かにどういうふうにするかというのは問題ですよ。

○委員 私は、皆さんのように活動シートを出せていなくて申し訳ございませんでした。

社会教育委員の会議というものがやっぱり周知されていないことを前回痛感したんです。それで、ワークショップをやったときに、議員の方も来ていただきましたし、結構いろんな方が参加してくださいまして、本当に世田谷区でこれを行っている意味というか、そういうものをもう少し広めていきたいなという気が、このメンバーだけで話し合っ、何か提言したところで、じゃ、実際それがどなたまで分かっている、どんなふうに展開されていくのかというのは、やっぱりちょっと見えにくいところがあるので、今、委員が言ってくださったように、今Zoomで公開みたいなこととお知らせして、実際こうやって、今皆さんが挙げてくださった方たちには参加していただくとか、そういうことができれば、もう少し広がっていくのかなというような、この社会教育委員の会議の到達点、ゴールが、最終的に取りまとめて提言しました。それがどこに反映されているのかというのが、前回からの申し送りでもあったと思うんですけども、その部分について、今期は少し考えて、今後、せっかくこうやっていろんな方が集まって、いろんな話をして、案を出し合っ、それが前回だと、例えばカフェをやりたいな、コロナで実はできませんでしたが、そういうのが現実になっていくようなものができたらいいなという、遠い将来であってもいいんですけども、そういう形になるようなものを残していけたらいいかなと思います。

○議長 ありがとうございます。前回の流れとか、実感、大変貴重な御意見をありがとうございます。

○委員 コロナの状況で、あれだけの人数は今年度に関しては難しいかなと思うので、やれば一番いいと思うんですけども、ちょっと形を変えた会のような形で。ちょっと1つ今思ったのは、昨年度の報告書の中に1つ課題がありましたよね。5地域におられる社会教育指導員さんでしたっけ……。

○議長 社会教育主事の皆さんです。

○委員 主事さんですね。主事さんプラス教育指導員さんにどれだけああいう形が浸透されて、どういうふうなリアクションというのかな、この社会教育を区で進めるに当たって、指針とか方針が出されたのかというようなこともちょっと知りたいなという気もしまして、そういう機会でも、例えばそんな人数も多くありませんし、リモートでももちろんいいんですけども、そんなことがちょっと出るといいかなと。去年のつながりで、ちょっと今思いました。

例えば前回の報告書で、そういう1つの課題が出ましたよね、いかに機能していくかと

ということです。主事さんとか、指導員さんの中で、それがどういう結果で、どういう課題ができたのか、課題だけでも結構なんですけれども、そんなことを聞ければいいかなとちょっと思いました。それも1つの、これからの4回、5回の中で、6回でも、1回でもいいんですけれども、そんなことが聞ければいいかななんていうことを思いました。

というのと、もう1つは、ちょっと回数もあれなんですけれども、まだ私自身もちょっと先が見えていない状況があるので、もう少し具体的な、4回、5回、6回の中でちょっと詰めて、自分の頭の中でもう少し映像をはっきりさせたいなという気持ちがありますので、今のところはそんなところしか発言できないかなと思っています。また5月までちょっと消化して、考えておきたいと思えますけれども、以上です。

○議長 ありがとうございます。今、私たちがお話ししたのは、ちゃんと語る場をつくろう、語る場があったらいいのではみたいな話なので、それぐらいだったらつくることができるのではないかみたいなことも思いますし、逆に私たちがつくっても、それは1回で終わりですけれども、だから、どういう方がそういう場をつくれたらいいのかみたいな話になってくると、今の委員の話から、社会教育主事の方の新しい役割というか、その方々がどのような場をつくっていくと、どういうふうになるんだみたいなことを語れるようなところも可能性があるかもしれませんね。どこをどう押したら、何がどう動いて、どういう人がどういうふうに、これまた違うつながりと、行動が生まれるんだろうかみたいな、そういう戦略的な提案になるというのも1ついいかなというふうにも思いました。

時間ももうあと少しで、8時よりも早く終ると言いながら、あと20分しかありませんので、全体を振り返っての話でも結構ですし、まだ御発言がそれほど多くない方で、ぜひ御意見をいただければと思います。

委員、いかがでしょうか。

○委員 前は、私は参加していませんので、ちょっと語る事が全くできないで申し訳ありません。

活動シートを出さなかったんですけれども、今年度異動したばかりで、このコロナで、地域のイベントは全てなし、全て自分で企画するしかありませんでしたので、地域との連携は全くないです。なので、この1年間はほぼ未知数で、また来年度に続くというところなんだなというふうに思っています。なので、1つも書けない状態なんですけれども、今、振り返ってこの活動シートを見ているんですけれども、中学校で言えば、これが全て一つ一つの部活動だと思うんですね。〇〇部、〇〇部が全てこの状態にあてはまってくると思

うんです。中学校は部活動というものすごいボランティア活動を抱えているわけですよ。そこに対しての地域の支援というのはほぼ得られないわけです。学校がボランティア活動としての部活動を抱えている限りは、なかなか教員を地域に出せない。特に土日は部活動をやっていますので、地域に出せない状態というのが常に続いていると思うんです。活動場所として、学校という場所を貸すことはできたとしても、なかなか教員というものを地域に出すことができないというのが、中学校としてはずっと続いているのかなという気がします。どのイベントに行っても、校長や副校長は顔を出すことがあったとしても、教員の顔が出ない、あるいは出せない。常に部活動を平日やり、土日に部活動の練習試合や大会に参加している状況、これをいかに変えていくか、あるいはそれを地域が支えてくれるか、あるいはこの維持継続、これがどうつながっていくのか、この辺が一番難しい、今後解消してほしいところではあるんですけども。

いよいよ4月から新しい学習指導要領に変わり、評価の出し方が大きく変わり、タブレットも入ってきましたので、ICT教育も進んでいく中で、さらにさらに大きなことを中学校、小学校も同じだと思いますけれども、抱えていきますので、この4月からはかなり大変なことが起きてくるかなというのが今の実感です。

○議長 ありがとうございます。そもそもの構造的な問題というのがたくさんあるので、無理があるわけですよ。その上に新しい指導要領だったりとか、IT化みたいなのがどんどん降ってきてみたい、大変な状況にあるというのが非常に分かります。

その辺のところも実は全く度外視して提案をするわけではありませぬので、実際になぜ学校が動きにくいのかみたいなことというのは、しっかり特定することはすごく大事ですよ。

軽井沢の風越学園という今年度から開校した、私の知人がつくった学校なんですけれども、幼稚園から中学校までの一貫校なんです。部活がないんですよ。部活をやっているからちゃんと教育ができないというので、私立なものですから、部活はありませんというのは最初から明言して、そうしたら何が起こったかという、中学生が放課後に何か運動とか、いろんな活動ができる地域のクラブをつくろうみたいな流れがあって、あるいはそういうことをやりたいという人たちが今集まって、まだ開校したばかりなので、それほど。近隣はスポーツセンターとか、スケートリンクとか、テニスコートみたいのがあるところのすぐ近くなんです。運動部も多分そういうところでやったりとか、そっちのほうが本来あるべきで、そういうことを中学校の先生に全部委ねていた社会では大分無

理があるなみたいなということを気がついたりもしました。中学生の部活は、地域の人がやればいいじゃないかみたいな、すぐにできるわけではありませんけれども、そもそもの問題定義としてはちゃんと押さえておかないといけないところですね。ありがとうございます。

あと、委員と委員にできればもう少しお話しただいて、終わりにしたいと思います。

○委員 私もどっちかという、学校経営とか、教育経営が専門なので、今の小学校、中学校の校長先生方が話したことがすごくいい、響いてきて、だから、私が学校運営委員会の委員長になったときは、学校の負担をなるべく増やさないとというのがモットーだったんです。だから、学校運営委員会の会議録も、自分たちでやろうと委員でやっていたんです。今日改めて皆さんのお話を伺っていると、やっぱり地域の活動の楽しさとか、そういうものって、偶発性とか、そういう言葉で言ったように、自由意志と自然発生がないと、本当に負担でしかないんですよ。やらなくちゃいけない、やらねばならない、集まらなくちゃいけないというのは、本当に負担だと思うんですよ。だから、そういう意味では、ある意味インフォーマルの場をどうやってつくっていくかと他の委員もおっしゃっている、ちょっとしたきっかけなんですよ。機会というか、それが一番重要なんじゃないかなというふうに改めて、皆さんの御意見を伺っていて思いました。

そういう意味では、祖師谷のお祭りの事例で、ぜひそこで出店をしている中学校の先生たちが何でそれに関わっているのかというのが、すごいお話を聞いてみたいなと思いました。普通であれば、本当にこんなに小学校、中学校って本当に忙しいし、あれやっちゃ駄目、これやっちゃ駄目、何かいいことをしても、何でこんなことをしたんですか、不適切ですよとか、いろいろ見られている中で、余計なことをしないほうがいいかなと思っている先生方もいると思うんです。なので、祖師谷のお祭りに関わっている先生、出店を出してもいいよ、出店したいなという先生たちのきっかけとか、そういうのは聞いてみたいなというふうに思いました。

○議長 ありがとうございます。もしちゃんと学校の仕事もされながら、割と地域のことでも出て行って、お祭りに出ている先生とかに何を考えているんですかみたいな話を聞いてみる機会というのは実は大事かもしれませんね。そういう方をもし御存じであればぜひ御紹介ください。すごく属人的なものなのか、環境が許しているのか、その人なりに気をつけていることがあるからできているのか、そこら辺のところも少し聞いてみたいですよ。

○委員 本当に、ほかの学校に移っても来ている先生がいるとおっしゃっていましたよね。

だから、私からすると、すごいそそられます。

○委員 特別にお願いをしたりというわけでもないんですが、その先生方が在任中にやっぱりお店を出してくださって、子どもたちととてもいい思いを共有されたんですよね。それで、子どもたちとのそのつながりもすごく深くて、子どもたちが楽しみにもしているし、その子どもたちに会いたいということで、それで転任をされた後も遊びに来てくださったり、手伝ってくださったり、だから一朝一夕でなったわけじゃなくて、そういう続けている中で、やっぱりそういう発展があったということで、それは初めから意図していたわけでもないんですが、とにかく子どもの安全を地域で安全安心のところにつながるということで、地域も、学校もみんなつながればというコンセプトでやって、それを続けてきたことで、その中での自然発生的なプラスの部分なのではないかなと思います。

でも、それも青少年委員というのは、その学校にいろいろかかわりが深いので、小学校も中学校の先生方の状況もよく承知していますので、先生方がものすごく大変な中で子どもさんたちを教育していらっしゃるという部分を分かっていますので、その部分の、あまり無理は強要しない。全部の先生方にそれをこうやってくださいということでもないし、もちろん校長先生のお考えにもよるものもあるかもしれませんが、ふだんの触れ合いの中でコミュニケーションが取れてくると、その中でそういう接点ができたり、先生方が協力をしてくださる。

また、そのいい連鎖が起こっているんです。先生方が学校の授業をするときに、やっぱりそういう学校外で、先ほど申し上げましたけれども、その子どもたちを見ることによって、それがまた学校の教育に生かされているというか、そういう部分もあると思いますので、ただ全部の先生方がそういうときに時間があって参加していただけるかということ、やっぱり子育てしていらっしゃる先生もいらっしゃれば、本当にいっぱい先生の先生もいらっしゃる、だから、それはもう全部の先生方にお願いするということは難しいです。先生方はやっぱり有志ですよ。それでもやるからにはということで、今度何のお店を出そうか、授業が終わって放課後先生方で相談してくださって、それでいろいろお店を考えてくださったり。例えば飲食のお店をやるときには、放課後に先生方が家庭科室で試食をしたり、つくってみて、これならいけるねみたいな、そういう先生方同士のコミュニケーション、それから学校生活以外の時間で子どもたちと触れ合えることのメリット、喜びみたいな、まずそういう楽しさみたいなことは、きっと先生が感じてくださったので、その後も協力をしてくださっているんじゃないかなというふうには思います。

これも全部、こちらも、開催側も無理は申し上げないけれども、よかったらということ  
で、そうしたら、そのつながりができることで、例えば地域であるお祭りにも、先生方が  
ふらっと様子を見に来てくださったりして、そうすると、ああ、先生みたいなところで、  
地域でも子どもたちの様子を見ていたり、そういう先生もいらっしゃる。でも、全部  
の先生じゃない。やっぱりそれはその先生が、自分のその学校での教えることに生かせる  
かなというふうに思われた先生が、そういうふうにしていらっしゃるんだと思うので、そ  
れも自然発生的なものですね。だから、そんな形で関わってくださるようになったという  
ことです。

○議長 ありがとうございます。

時間も迫ってきてしまいました。委員、最後に何かありますでしょうか。

○委員 活動シートの御紹介のときに、最初に幾つかお話があったんですけども、学校  
と地域の協力の関係性の度合いというんですか、それは、地域の方って。学校にこんなこ  
とをしてほしいといふふうに思っている方、中にはいらっしゃるかもしれませんが、  
むしろ地域の方が学校のために何ができるだろうと、学校を支えるためにどんなことをし  
ようかというような気持ちの方のほうが多いと思うんです。

私も小学校、中学校の学校運営委員ですし、学校支援ボランティア、コーディネーター  
もやっておりますので、学校で子どもたちが元気に安全に過ごすために何ができるだろう  
というのは常に考えて、みんなで協力をしているところなので、学校に求めることといえ  
ば、やっぱり何かをするときに場所を提供していただけること、本当にそれでいいと思う  
んです。学校の先生方に土日も出てきてくださいというような強制ももちろんしたくない  
ですし、私たちも保護者であり、PTAであった立場ですけども、今は一般の企業で働  
いている一社会人であって、その一社会人に自分の働いている、地元の何かをやってくだ  
さいと来たら、私はこの人じゃないですけどもと思う人もいると思うんです。なので、  
手伝ってくださったり、参加してくださるのは非常にありがたく受け入れてやっていただ  
く、けれども、決して強制はしてはいけないことだと思いますので、校長先生方もきっと  
先生方にそういう思いでいろんなお願いはできないよというふうにおっしゃっているんだ  
と思いますからそれはそれでいいと思いますし、学校は場所を提供していただければ、私、  
個人的には非常にそれでいいと思っております。

○議長 ありがとうございます。大変頼もしい御提案、ありがとうございます。

ということで、ちょっと時間が過ぎてしまいましたので、一旦議論はこちらで終わりと

と思います。皆さんのほうから何か御案内があれば、あと事務局のほうにお戻ししたい  
と思います。

○事務局 皆さんから何かありますか。よろしいでしょうか。

それでは、先ほどもスケジュールの案を見ていただいたんですが、3月、4月は年度の  
終わりでもあり、また、年度の初めでもあるので、それぞれ皆さん、お忙しいと思いま  
すので、第4回目は、来年の5月を予定しております。またこれは、議長、副議長と相談  
しながら日程を調整させていただきたいと思っております。

ついでながら、まだまだ議論不足といいますか、方向性がそれぞれ共有されていないと  
ころもあつたりしますので、少し時間をかけながら、どういうゴールを目指していくのか。  
やっぱり学校でできることは何なのか、もうこれしかできないというのは、ある意味、割  
り切って考えてもいいのかなという気がしますし、それから最後、お話しされたように、  
地域はやっぱりこんなふうに思っているという、例えば学校支援コーディネーターだとか、  
あるいは学校運営委員の方だとか、いろんな地域のおやじの会のことも含めて、そうい  
う人たちと実際垣根を下げながら話していく。我々はこんなふうを考えているよというこ  
とも必要なかな。ワークショップというお話もありましたけれども、そういうことも必要  
ではないかなというふうに思っています。

子どもたちは、学校だけで、地域だけで、家庭だけでというわけではなくて、それぞれ  
の中で生活して、成長していっていますので、間違いなく連携、協働というのはこれから  
も必要になってくると思うんですが、ただ一方では、学校の働き方改革というのが大きな  
課題の一つになっていますので、そういうのをどうクリアしていくのかというところかな  
と思っておりますので、「おやまちプロジェクト」だけがということではなくて、どの地域  
でも連携、協働できるような、そんな仕組みが考えられればとは思っております。ぜひ引き  
続きどうぞよろしくお願いいたします。

○議長 ありがとうございます。

では、今日はこれで以上ということによろしいでしょうか。また日程については事務局  
のほうから御案内させていただくことになるかと思えます。

皆さん、今日は本当にありがとうございました。